『歴代両浙詞人小伝』の著者、周慶雲のこと

松尾肇子

中国では、ながく清朝まで科挙による英才登用が行われ、詩人の多くは官界にあって政治に携わった。つまり、政治家であって詩を作らない者はなかった。中華民国の成立は、このようなそれまでの詩壇の常識を大きく揺るがす出来事でもあったはずである。この時代を考える手だてとして、詩文集にとどまらず、『歴代両浙詞人小伝』や『琴史補』をはじめとする各種書籍を出版した周慶雲（一八六四～一九三三）という人物を紹介したい。

（一）生涯

周慶雲は文学者ではない。彼の生涯は、いわゆる民族資本家の一典型である。『呉興周夢坡先生年譜』（民国二十三年序、『近代中国史料叢刊』第八十二輯収録）によって、以下に略歴を記す。この年譜は彼の子の周延礽が著したものである。周慶雲と妻との間には十二人もの子どもがあったが、五番目の周延礽だけが男児だった。

五世の祖である周文魁（聖能公）は、乾隆二十六（一七六一）年、余姚県西郷水閣村（浙江省。紹興と寧波との中間に位置する）から呉興県南潯鎮（浙江省湖州市。南潯鎮は江蘇省上海市との境に近い）へ移住した。その子、つまり周慶雲の曾祖父に当たる周恒（東橋公）、その次男である周良苗（稲村公）から、慶雲の生父である周昌大（味詩公）および弟で慶雲の嗣父となる周昌熾（味六公）まで、南潯鎮で製糸業を営んでいたようだ。しかし咸豊十（一八六〇）年南潯の町に三度にわたって太平天国軍が侵入し、一家は上海へ避難した。やがて南潯で「申泰行」を経営する周昌大と末弟が絹や棉花を集め、それを「申昌絲号」を創業した昌熾が上海で売りさばくという協業で、彼らは成功する。

周慶雲は同治三（一八六四）年十一月二十九日上海で誕生し、同治五（一八六六）年、南潯に戻った。父は桂栄先生と金恩綬先生を招いて家塾を開設し、四人の男児の教育に当たらせた。それは旧来の教育、つまり科挙を受験するための教育だった。長兄の周慶賢（琴軒公）（?～一九〇七）は光緒八（一八八二）年に挙人にあげられ、地方官僚となっている。次兄の周慶森（蓉史公）（一八六一～一九一一）も後に平陽泰順県学教諭を勤めた。この二人の兄は清朝と時を同じくして世を去ることになる。

周慶雲は、同治十（一八七一）年八歳から学習を開始し、十三歳で五経を終える。十六歳の時、金恩綬は健康を害して辞去し、厳文輝先生に替わる。光緒六（一八八〇）年、十七歳で応試。翌年秋、県学に入学し、十月、蔡氏（一八六二～?）と結婚した。帰安（浙江省湖州市）の翰林院待詔、蔡世錞の娘である。父の期待はこの婚姻にも現れている。光緒十一（一八八五）年には杭州で省試に応じたが、合格し

なかった。この後五回の科挙をすべて受験したが、光緒二十三（一八九七）年九月、三十四歳での省試にも不合格となって、彼の受験生活は終わる。なぜならばこの年の科挙の最終試験のために北京に集まった受験生を巻き込んで戊戌の変法、さらには戊戌の政変が起こり、科挙は廃止されたからである。科挙及第は父の希望であっただけでなく、彼自身の夢だったに違いない。ちなみに光緒二十九（一九〇三）年四十歳のときには形式的に永康県学教諭や直隷州知州に任ぜられている。

科挙を受験し続けた周慶雲だが、実際には科挙受験に先だってすでに実業家として活動を始めていた。光緒十（一八八四）年、子の無かった叔父の周昌熾が死去し、二十一歳となっていた周慶雲は絹糸の商売を引き継いだ。しかし、不調となった製糸業から撤退し、光緒十七（一八九一）年春には杭州で塩の売買権を入手。九月に父を亡くし、冬には杭州へ転居する。二十八歳になっていた。塩は国家の専売品であり、その売買権を得たことは利益を約束されていると言ってよい。光緒三十一（一九〇五）年四十二歳の夏、嘉所甲商に任ぜられ、浙江省の嘉興・秀水から江蘇省の常州、蘇州までを含む地域を管轄した。光緒三十三（一九〇七）年には浙江興業銀行設立資本の四分の一を拠出するほどになっている。しかし宣統三（一九一一）年辛亥革命が起こり、九月十五日杭州独立。彼は家族とともに上海へ移った。嘉所甲商は辞任したが、中華民国元（一九一二）年、四十九歳の時には設立された両浙塩業協会の会長となっている。翌年杭州に独資で天章絲織廠を、合資で虎林絲織公司を創設。民国三（一九一四）年塩税制度に切り替わり、蘇五属塩商公会組織が成立し副幹事となる。このように、清末民初における行政・税制の変化に対応しつつ、銀行や蘇杭鉄道への投資も行って、実業家として成功をおさめた。

その後も旺盛な活動を続け、民国十五（一九二六）年、六十三歳のときには、嘉興に「秀綸」「厚生」ふたつのシルク工場を開設。十七（一九二八）年、上海での塩務討論会に招集される。製塩工場「五和精塩公司」を浦東に設立。しかし二十（一九三一）年十二月、六十八歳のとき、第一次上海事変が起こり、巨額の損失を被った。民国二十二（一九三三）年十月、七十歳で上海において死去した。その最晩年まで杭州と上海とを頻繁に往来している。

周慶雲が生まれ活動した浙江・江蘇は、古くから教育熱心で、科挙及第者を輩出した文化水準の高い地方である。彼自身は最後の科挙世代であるが、子の周延礽は浙江私立法政学校を卒業後、民国政府のもとで法政に携わった。その子の世代も、医師となった周世選を除き、周世達・世術・世逑とも大学を卒業後、官僚となっている。

なお、協力を求められたという側面が大きいと思われるが、周慶雲は郷里や杭州に学校や結核の療養所を建てるなど、各種の社会活動にも取り組んだ。さらには各種の文化活動に参加し、出版助成するなどして、後援している。

（二）文芸活動

ここでは、文芸面における周慶雲の活動に焦点を当てて紹介したい。彼は、精力的に琴社や詩社に参加し、それらに関連する琴譜・印譜・詩詞集を刊行した。科挙の受験勉強は四書五経の暗記に始まり詩文作成の熟達に終わるが、先に見たように、周慶雲の学術および精神世界の背景はこうした前近代にある。光緒八（一八八二）年十九歳のときに上海へ赴き「上海夜遊詩」を作ったという記事を初めとして、折りに触れて詩を作ったり、家族で或いは客人と和韻したりしている。また、日清戦争や膠州湾事件、義和団事件など次々に起こる国難のたびに悲憤の詩を作っている。「夢坡」を号としたのも、光緒二十二（一八九六）年に夢のなかで東坡居士を号とした蘇軾と語り合ったことによる。唐宋八大家のひとり、北宋の蘇軾は、中国人の尊崇を集めてきた文人である。

『歴代両浙詞人小伝』の著者、周慶雲のこと

周慶雲の著述の最初は光緒十九（一八九三）年三十歳のときの『隷源』だが、これは顧南源の『隷弁分韻』に詳注を施したもので、いわば勉強のあとを示すものであり、刊行されていない。続いて光緒二十一（一八九五）年には、一族の原籍である余姚の宗譜『姚江族譜』を入手整理して、鈔本を作成し、それぞれの宗祠に配付した。家譜の整備編集はこの後も続けている。塩業が軌道に乗った頃で、時間的にも精神的にも余裕が出てきたのであろう。

出版の最初は、光緒二十七（一九〇一）年の『春燕唱和集』および『泰西新史攬要節本』八巻の二本である。『春燕唱和集』は汪昌燕の「春燕詩」に周慶雲以下数十人が和した詩をまとめた、言わば同人誌である。『泰西新史攬要節本』は、『泰西新史攬要』二十四巻のダイジェスト版である。『泰西新史攬要』は、イギリス人ロバート・マッケンジーの著した十九世紀ヨーロッパ史をアメリカ人ティモシー・リチャードと蔡爾康とが翻訳したもので、英米宣教師によって上海に設立された出版機構広学会が出版してベストセラーとなっていた。『泰西新史攬要節本』も数十万部を売り上げたと言う。中国では上海を中心に出版事業が盛んになる時期でもあり、この出版は商売として成功したと思われる。但しこの後、出版はしばらく行っていない。

周慶雲がふたたび出版に熱心になるのは中華民国になってからのことで、それは詩社・琴社への参加と時期を同じくする。周慶雲が詩社に社員として参加した最初は四十九歳、上海で高鈖が創始した希社で、中華民国元（一九一二）年七月十五日の中元のことである。姚文棟・潘飛声・鄒弢と共にその後も豫園で毎月酒席をともなって開催された。また冬には消寒会を、劉炳照とともに主催した。会場となった双清別墅は、シルクで財を成した徐鴻逵の別荘で、参加者には繆荃孫や劉承幹といった著名な学者・蔵書家をはじめ、このころ上海に移住し商務印書館の顧問となっていた長尾雨山の名も見える。清末民初の上海には、民族資本家としてばかりでなく文化人としても一流と目される人々が集まっていた。周慶雲もまたそうした一群に加わったのである。上海に転居してからは兪雲・李徳潜について琴を学び始めてもおり、『夢坡室収蔵琴譜提要』を編集するなど（民国十九年に刊行）、琴書および古琴の収蔵家としても有名になっていく。

翌年の民国二（一九一三）年には、淞濱吟社（淞社と略称する）の第一集が、周慶雲・劉承幹を主席として開かれた。ここには前年の消寒第一集の参加者の多くに加え、鄭文焯や夏敬観などが参集し、清朝の風気を色濃く残す詩社となった。周慶雲自身の手になる『淞濱吟社集』序文には、宋の遺民が結成した月泉吟社にならって結社したと言う。淞社が民国十四（一九二五）年に解散すると、十五年には消寒会の第二集、十八年には海上詩鐘社に参加している。また、民国四（一九一五）年から三年間は、朱祖謀（原名は孝臧）を社長とする春音詞社に第一回から参加し、填詞を学んだ。周慶雲の詞作はこの前年に李岳端から贈られた詞に和韻したことに始まる。春音詞社解散後は自身で作詞することからは離れていたが、詞への興味を失ってはいない。民国十（一九二〇）年には杭州西渓に秋雪庵を重建し、歴代両浙詞人祠堂を建てた。落成後は頻繁にここを訪れ、詞人祭を挙行している。やがて民国十九（一九二九）年に上海で朱祖謀（漚尹）の漚社が始まると、すでに六十七歳になっていた周慶雲はあらためて填詞の指導を受けている。詞や琴は、科挙受験のための教養ではなく、高度に雅趣のあるものという認識が一般的である。上海に移り、海上派と呼ばれる文化人と交友関係を結ぶ中で周慶雲はそれらを学ぶ機会を得たとともに、周慶雲が主催した詩社に参加した鄭文焯や朱祖謀ら清朝遺民となった人々の生活を支援する役割を担ったのであろう。それは彼の出版事業にも窺われる。

民国時期、各社への参加と平行して、周慶雲は旺盛に出版を行った。民国元（一九一二）年、原稿は前年に完成していた『霊峰志』四巻を出版した。郷里の名勝の地誌であり詩集である。民国三（一九一四）

年、母方の親戚であった董熊（一八二二～六一、号は暁庵）の『玉蘭仙館印譜』二冊を重印、また琴関係では『琴書存目』六巻附『琴書別録』二巻を出版した。さらに自分の詩集『之江濤声』一巻、詩社の唱和詩を集めた『壬癸消寒集』一巻および『其寧集』二巻、亡くなった兄周慶森の詩集『蓉史公敝帚集』も出版している。その翌年には、『塩法通志』百巻を出版した。民国元年秋から三年夏まで二年を費やして執筆したもので、塩商という自身の経歴を発揮したものと言えよう。以後ほぼ毎年刊行した書籍は、琴書、印譜、詩文集に大別でき、また別の側面から言えば、文化人の後援、自著、一族あるいは故郷の顕彰、という三類に分けることもできる。

琴書は多くはないが、比較的知られている。民国八（一九一九）年五四文化革命運動の年に、これに対抗するように塩商の葉希明が蘇州の怡園で開催した琴会に続けて、周慶雲は上海の晨風廬で琴会を開催し、彼が主編した『琴書存目』のほか『琴史補』二巻『琴史続』八巻を刊行して会場で販売した。更にこの会の記録を『晨風廬琴会記録』二巻として民国十一（一九二二）年に出版している。また民国八年には楊宗稷の『琴学叢書』（琴粋四巻、琴話四巻、琴譜三巻、琴学随筆二巻、琴余漫録二巻、琴鏡九巻）の出版に資金援助した。資金援助という点では民国十八（一九二九）年『中国音楽史』出版もそうである。

篆刻関係では、自らの収蔵品によって中華民国十五（一九二六）年『古玉璽印』、十六（一九二七）年『夢坡室獲古叢編』、十七（一九二八）年『夢坡室金玉印痕』七巻、また民国二十一（一九三二）年には『夢坡室蔵硯拓本』を印刻している。

詩文では民国四（一九一五）年『淞濱吟社甲乙集』『百和香集』、民国六年『晨風廬唱和詩存』十巻、『甲乙消寒集』、民国十七年『晨風廬唱和続集』十二巻、民国二十二年『逆旅同声集』二巻（編集は彼の出版のなかでは最も早い民国元年）などあるが、いずれも記念誌として同人を中心に頒布されたものだろう。これに対して、自分の詩文集は多くない。民国八（一九一九）年の『東華塵夢』『海岸梵音』、民国十五（一九二六）年の『天目遊記』は旅先で詠じた詩文をまとめて出版したものである。さらに六十八歳の晩年に至った民国二十（一九三〇）年『夢坡詩存』十二巻を、死去の年に『夢坡詞存』二巻『夢坡文存』五巻を出版している。一方で、族譜の編集や一族の為の公墓の建立などとならんで、詩文集を出版することによる一族の顕彰に熱心で、兄の周慶賢の『琴軒公晩菘斎遺著』および『晩菘斎遺墨』、周慶奎の妻徐熙珍の『従叔母徐氏華蕊楼遺稿』、母のために建てた九重塔に刻まれた詩文を集めた『呉興周母董夫人経塔題詠』二巻もある。また鈔本のまま出版されることはなかったが周慶奎の『従叔父紫垣集』や周良苗の『稲村公聴香楼尺牘稿』、周昌熾の『別駕公類記稿』も編集していた。

彼の出版事業の中で目を引くのは、故郷の潯渓や居を構えた杭州の名勝ゆかりの詩文や人物の伝記を輯録しては公刊していることである。民国五（一九一六）年『潯渓詩徴』四〇巻補遺一巻、翌年『潯渓詞徴』二巻、民国十四（一九二四）年『潯渓文徴』十六巻を刊行している。また、民国八年『南潯擷秀録』、民国十一（一九二二）年『南潯志』六〇巻もある。杭州については民国十一年の『西渓秋雪志』四巻、民国十六（一九二六）年の『莫干山志』十三巻がある。これらに比べて民国十一年の『歴代両浙詞人小伝』十六巻は、周慶雲が活動した地域が浙西派とよばれる詞派の中心地であったこともあって、浙西派詞人の辞典としての役割を果たしている。周慶雲の年譜には没後に『潯雅』甲集三巻乙集三巻丙集四巻丁集六巻戊集二巻および『続歴代両浙詞人小伝』が未刊のまま、残されていたと言う。故郷の南潯と詞とが、晩年の関心の中心だったのだろう。

淞社の主席を務めた周慶雲と劉承幹（一八八二～一九六三）は、ともに南潯県の出身である。劉承幹は周慶雲より十八歳年少だが、絹糸

『歴代両浙詞人小伝』の著者、周慶雲のこと

で巨万の富を築いた祖父以来の財産で、時代の変わり目に世に出た私家の蔵書を収集して嘉業蔵書楼を建て、『嘉業堂叢書』『呉興叢書』をはじめとする大量の書籍を出版した。この出版事業には多数の学者・文人との互恵関係があったと思われる。周慶雲の交友関係は劉承幹と共通の部分が多く、自らの背景が清朝にあると認識していたであろう点も共通している。ただし、周慶雲は自力で財を成したのであり、その点では商人としてより現実的だっただろう。劉承幹と同様に、周慶雲は編者として、詩社や琴社に集った人々の協力を仰ぎ、あるいは支援して、出版事業を行ったのだろうが、出版の時代的要請などに関心は薄く、自分の周囲に集まる文化人の後援者という立場は崩さなかったように見える。なお、周慶雲の出版物はいずれも、十行二十一字、小字双行、四周双辺、有界、版心は白口、上のみ黒魚尾という同じ版式で行われており、死去を前に、夢坡室叢書と名付けた。

参考文献

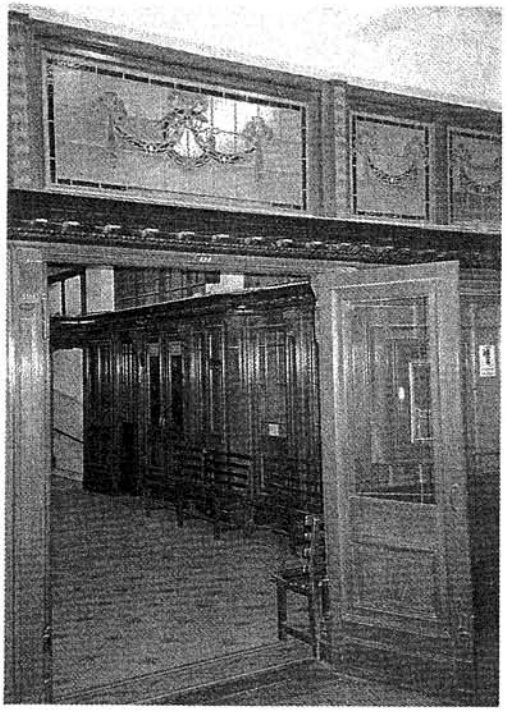
孫克強「『歴代詞人考略』作者考弁」(『文献』二〇〇三年四月第二期、二〇七～二一二頁)

李剣亮「周慶雲的西渓詞縁」(『浙江工業大学学報(社会科学版)』第五巻第二期、二〇〇六年十二月、一二一～一二五頁)

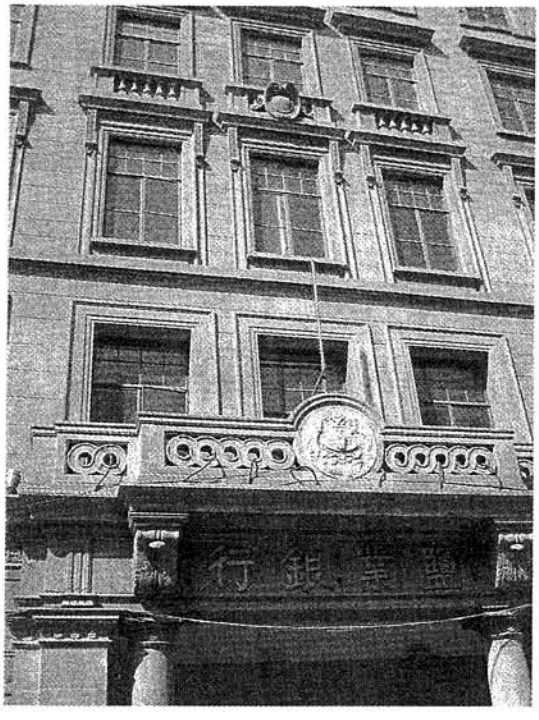
陳子鳳「近代海上淞社名人詩稿」(『収蔵家』二〇〇八年七期、二〇〇八年七月、三十三～三十七頁)

羅恵縉「民初遺民対晩明歴史的文学表達—以『淞濱吟社集』為中心」(『江漢論壇』二〇〇八年九月、一一七～一一九頁)

(本学人文学部准教授)



(旧)上海絲業会館内部　(筆者撮影)



(旧)塩業銀行外観　(筆者撮影)